F-1

ノダ文：命題の性質

蒲地 賢一郎（志學館大学）

1. はじめに

● 本研究の主張点を、次の(1)のように述べたい。

(1) 文中でノダに先行する、命題（主語+述語）の性質は、条件文の前件の性質（赤塚(1998)）に類似している。

●上で述べたように、文中の「ノダ」の直前の主語と述語の意味論的な特徴に注目し、以下で分析、議論をすすめていく。

● 本研究は、いわゆる「ノダ」を含む文を扱う。より正確には、文体の「ノダ」と言うよりは、口語体と言われる「ンダ」を含む文を、研究対象とする。

●「ノダ」には、様々な意味・用法があると言われている。例えば、野田(2012)では、次の(2a)は日焼けの事情を説明する場合、(2b)は事情を納得する場合、(2c)は命令する場合とされている。

(2) a. 海に行ったんだ。 (野田 2012, p.141)
b. そうか、海に行ったんだ。 (野田 2012, p.141)
c. 行くんだ！ (野田 2012, p.141)

● 本研究は、特に(2b)の種類の「ノダ」文を観察していく。(2b)は、野田(2012)では「事情の納得」と述べられているが、後の第 3 節で示すように、話し手が「確信」をしている、または、「推量」をしているというように、捉えることも可能だと述べておきたい。「ノダ」に様々な意味・用法があると言われるゆえんでもある。

2. 赤塚(1998)

● 具体的に、ノダ文を観察する前に、赤塚(1998)で提示されている「条件文の前件」というものを導入しておきたい。

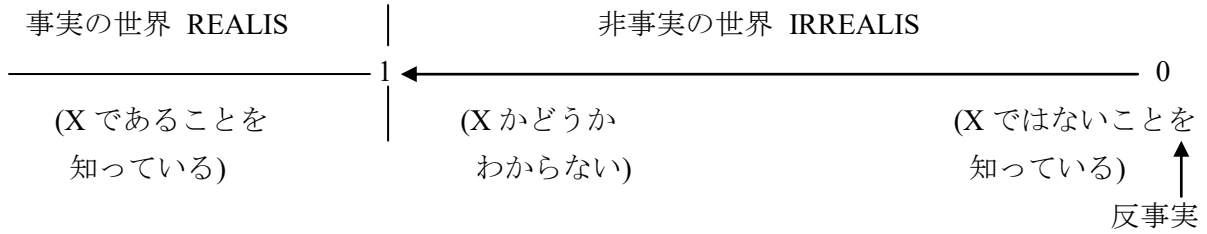
● 赤塚(1998)において、自然条件文を観察する上で必要なことは「主観的」な事実とされている。関連して、主観的事実の世界と主観的非事実の世界というものが想定されている。

(3) 事実の世界の事実性(事実である度合い)を数字の 1 とすると、反事実の事実性は 0 である。非事実の世界は、事実性 0 から事実性 1 の直前に至るまでの広い領域である。

(赤塚 1998, p.28)

● そして、赤塚(1998)では、以下の(4)に見られる認知スケールというものが設定されている。

(4)　認知スケール (Epistemic Scale)



(赤塚 1998, p.28)

● 次の(5)は、認知スケールを具体的に表わした例である。(5)の日本語文は、英語の訳に示されるように、二つの解釈が可能とされている。普通の条件文として解釈されるのは、話し手が生まれてくる赤ん坊の性別をまだ知らない状況となっている。

● 一方、反事実の条件文として解釈されるのは、話し手がすでに性別検査の結果を知っていて、残念な気持ちを表わすような状況となっている。

(5)　この子が女だったら、いいのになあ。　(赤塚 1998, p.29)
"If this child is a girl, I'll be so happy."　(赤塚 1998, p.29)
"If this child were a girl, I'd be so happy."　(赤塚 1998, p.29)

● そして、「条件文の前件」に関する所を、赤塚(1998)から引用する。

(6)　発話の場で初めて話し手の意識のなかに入った情報は、たとえ話し手がその場で真と信じても、その瞬間にはまだ非事実である。　(赤塚 1998, p.31)

● 次の(7)は、病院に入院している友達を見舞った時の話し手の発話である。

(7)　(とても喜んでいる友達を見て)
こんなに喜んでくれるんだったら、もっと早く来ればよかった。　(赤塚 1998, p.31)

●「前件は、意外な出来事に対する驚きを表わす」と赤塚(1998)で述べられている。先の(4)の認知スケールにつけ加える赤塚(1998)の提示が、以下の通りである。

(8)　前件が表わす事態の眼前性(immediacy)

● 次の(9)において、その眼前性が認知スケジュール上に示されている。

(9)　事実の世界 REALIS　｜　非事実の世界 IRREALIS

1●

(X であることを知っている)　↑(X だとは、今の今まで知らなかった)

(赤塚 1998, p.31)

3. ノダ文の先行研究

3.1. 名嶋(2007)

● 名嶋(2007)は、ダ、ノダ、推量のモダリティ形式(ダロウ、ノダロウ)の相互承接関係というものを提案している。次の(10)が 4 つの表現形式に関する範列関係というものを表わしている。「確信」、「推量」のカテゴリーは仁田(2000)での用語に準じているとのこと。

(10)　確信(確定)　推量(未確定)

(認識レベル)　ダ ↔ ダロウ

↓　↘

(解釈レベル)　ノダ ↔ ノダロウ　(名嶋 2007, p.169)

● この図式のダ、ノダを具体的に表わすのは、次例(11)のような文である。(11a)は話し手の認識レベル(描写)での確信を表わし、(11b)は解釈レベルでの確信を表わすというものである。

(11)　a.　雨が降った。
　　b.　雨が降ったんだ。

● 名嶋(2007)の分析は、次例(12a)のわずかな不自然さを正しく説明できる。話し手が降雨について確信している場合、副詞「きっと」を加えて推量するのは、冗長であるし、非論理的でもある。(「きっと」は確信をもって推量する (飛田・浅田 1994) 。)

● 一方で、(12b)については、問題があるかもしれない。(12b)は、濡れている道路を話し手が見た状況で、容認可能であるが、推量(きっと)と解釈レベルでの確信(ノダ)が同時に文中に現れ、一見矛盾した意味論的な組み合わせが存在することになる。

(12)　a. ?きっと雨が降った。　([?]は文がいくらか不自然であることを示す.)
　　b. きっと雨が降ったんだ。

● 観察から導き出されることとして、(12a)と(12b)の命題「雨が降った」は全く同一の形をとりながら、意味論的に意味が異なるかもしれないということだ。「ノダ」に先行する(12b)の命題の性質には、考察の余地が残っているのではないだろうか。

● 赤塚(1998)を援用してみる。(12b)の命題「雨が降った」が表わす情報は、(9)の「●」の位置と同等ではないのか。事実ではなく、非事実であるから「きっと」を加え、推量可能とするなら、(12b)の容認性を無理なく説明できる。

● 先の(12)の例を用いた理由を、ここで述べておきたい。次の(13)は Greenbaum(1969)からの例文である。

(13)　Surely it has rained.　(Greenbaum 1969, p.96)

● 以前、この種の文を観察していた時、この英語文に対する日本語訳は(12a)、(12b)のどちらなのかと思案した。直観的に(12b)の方が適切な感じはあったが、それでは、「んだ」に相当する英語表現は何なのかと、また別の疑問が出てきた。今回、名嶋(2007)の分析と関連していると判断し、(12)のような例を取り上げた。

3.2. 野田(1997)

● 野田(1997)は、次の(14)を対事的ムードの「ノダ」の例とし、話し手が発話時において、それまで認識していなかった事態 Q（ここでは「用事がある」）を把握する場合としている。

(14)　山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。　(野田 1997, p.67)

● この「事態の把握」に関して、以下のように、一つ疑問点が浮かんでくる。

(15)　把握している事態であるなら、あえて「きっと」を用いて推量する必要があるのだろうか。

● 関連して、次例(16)を観察してみよう。話し手はアミと虫かごを持った太郎が家の外に出てきたのを目にする。 (16)の両文は(14)のように、文頭に「きっと」、そして文末に「ノダ」が現れている。野田(1997)が予測する、太郎が網とカゴをもって出てきた事情として、「セミを捕まえに行く」、そして「セミを見つける」が話し手に把握されているなら、両文とも容認性は同じはずである。

● しかし、(16b)はやや不自然な感じがある。野田(1997)の「事態の把握」に対しては、まだ検討すべきところ（命題の中の述語「捕まえに行く」と「見つける」との意味論的な違い）が残っているのではないだろうか。

(16)　a.　きっと太郎はセミを捕まえに行くんだ。
　　b. ?きっと太郎はセミを見つけるんだ。

4. 出来事(Event)

● 先の(16)の例文に関する容認性は、赤塚(1998)の認知スケールで説明できるのだろうか。(16)の命題の述語「捕まえに行く」と「見つける」を比べて、どちらかが事実で、そのもう一方が非事実であるとは判断ができない。赤塚(1998)とは異なる視点を設ける必要があるのではないだろうか。

● 主語+述語が表わすのは「出来事(event)」と考えてみる。以下は Dowty(1991)からの引用である。

(17) …., whereas *aspect* markers serve to distinguish such things as whether the beginning, middle or end of an event is being referred to, whether the event is a single one or a repeated one, and whether the event is completed or possibly left incomplete. (Dowty 1991: 52)
上の 2 行目の最初の whether 以降の英語文は、概ね、次の日本語文に相当。(出来事の始まり、途中過程、終わりについて、出来事が一回限り、または繰り返しであるのか、そして出来事の完了または未完了について。)

● Vendler(1967)を基にした verb classification という動詞(句)に関するカテゴリーがある。日本語では、金田一(1976)の研究がある。

(18)

States	Activities	Accomplishments	Achievements
know	run	paint a picture	recognize
believe	walk	make a chair	spot
have	swim	deliver a sermon	find

(Dowty 1991: 54, 便宜上、用例を一部省略.)

● 先の(16a)、(16b)は、各々、Activities、Achievements に相当すると判断する。

(19) a. 捕まえにいく Activities
b. 見つける Achievements

● 今、仮に、太郎がペンキを持って家の外に出て来たのを話し手が見ている。家の外の壁は部分的に色あせている。この状況なら、次の文(20)は容認可能になり得る。

(20) きっと太郎は壁を塗るんだ。 Accomplishments

● もう一つのカテゴリーである States は、日本語の場合、他の 3 つと異なり、動詞が「ーテイル」形を取るため、考察の対象から外してある。しかし、状況によるかもしれないが、「ーテイル」形であっても、例えば「きっと太郎はその事を知っているんだ」のように容認可能な文は存在する。だが、厳密に言えば、(19)、(20)の例と異なり、States の表わす出来事が、その他の 3 つの例のように、「未来時」を示していないので除外しておく。

(21)　Statesの場合を除き、命題内の動詞(句)がachievementsを表わす場合、ノダ文は不適切(未来時)。

● 先の(17)でDowty(1979)は、aspectとtenseの区別をおこなっているが、(16)、(19)、(20)の観察を続けると、また別の事実が分かってくる。当該の動詞(句)が過去形をとると、全ての文が容認可能になる。ノダ文と時制、及び動詞の意味との関与の可能性については、大橋(1999)でも指摘されている。

(22)　a. きっと太郎はセミを捕まえに行ったんだ。　Activities
　　b.　きっと太郎はセミを見つけたんだ。　Achievements
　　c.　きっと太郎は壁を塗ったんだ。　Accomplishments

5. おわりに

●ノダ文の命題の性質は、赤塚(1998)での、条件文における前件(の命題)の性質に類似している。これは、話し手の視点として捉えることが可能ではないだろうか。

●上述の分析から派生して、ノダ文の容認性には、命題(主語＋述語)そのものが表わす出来事(event)としての性質が関わっている。Aspectという視点から捉えることが可能ではないだろうか。

参照文献

赤塚紀子. (1998).「条件文とDesirabilityの仮説」. 赤塚紀子・坪本篤朗(著)『モダリティと発話行為』. 研究社. pp.2-97.

大橋浩. (1999).「日本語の結論を表す条件文について」. 稲田俊明他(編)『言語研究の潮流』. 開拓社. pp.67-81.

蒲地賢一郎. (2012).「認識論における「のだ」」. 日本言語学会 第144大会 予稿集.

金田一春彦. (1976).「国語動詞の一分類」. 金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』. pp.7-26.

Greenbaum, Sydney. (1969). *Studies in Adverbial Usage*. Longman.

Dowty, David. 1991. *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Kluwer Academic Publishers.

名嶋義直. (2007).『ノダの意味・機能：関連性理論の観点から』. くろしお出版.

仁田義雄. (2000).「認識のモダリティとその周辺」. 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(著)『日本語の文法3　モダリティ』. 岩波書店. pp.81-159.

野田春美. (1997). 『「の(だ)」の機能』. くろしお出版.

野田春美. (2012). 「「のだ」の意味とモダリティ」. 澤田治美(編)『モダリティII：事例研究』（ひつじ意味論講座4）. ひつじ書房. pp.141-157.

飛田良文・浅田秀子. (1994).『現代副詞用法辞典』. 東京堂出版.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.